皆様の課題をICTで解決する
DAiKO
http://www.daikodenshi.jp
FUJITSU パートナー
大興電子通信株式会社

CHIBA UNIVERSITY PRESS
聖徳大学
ユニバーシティプレス
大学生記者が編集

自分らしい生き方探して

近年、多様な考え方が認められ、個人が尊重される時代となった。新型コロナウイルスの影響もあり、働き方も変わり、より多くの選択肢を得られるようになった。多くの選択肢がある中で、自分の可能性を信じ、新しい生き方を創造する人々・企業の取り組みに注目した。

外国人労働者に活躍の場

茂原・ニチモ　海外の介護技術発展へ

ニチモ（茂原市）では介護業界最大の弱点である介護職員の確保及び資質向上を目的に、東南アジア諸国から介護職員を目指す若い人材を育成するニチモプロジェクトを６年前から推進している。

提携する日本語学校では日本語検定試験Ｎ２取得を目指し、2年間学ぶ。学校行事以外の時間で介護現場のアルバイトを行い、実技を身に付ける。その他にも介護福祉士育成コース（４年間留学）や特定技能１号（介護）による介護職員の育成コースなど自分の目標に合ったコースを選ぶことができる。現在外国人留学生18人、特定技能実習生22人が在籍。

日本人ヘルパーも「職場内で外国の文化に触れるきっかけができ、明るくなった」と語る。「言葉が通じない中で大変なことはたくさんあるが、一番大切なのは利用者に向き合う気持ちだ」と大内力取締役は考える。

デイサービスピーチハウスで働く外国人ヘルパー達＝９月11日、茂原市

東南アジア諸国は大家族が多く、高齢の家族の面倒を見ることが当たり前であり、介護に対してマイナスなイメージはない。外国人特有のスキンシップは利用者との良い触れ合いの機会である。また、母国での業務経験を活かして活躍するヘルパーも多く、その中には責任者としてのキャリアを歩むケースもある。

ニチモの新たな目標は海外に介護施設をつくることだ。介護先進国として、日本のきめ細やかなサービスや介護の技術を学んだ外国人ヘルパーが母国で活躍することで海外の介護技術の発展にも繋がる。

外国人技能生にはしっかり業務にあたることのほかに日本を楽しんでほしいと大内さん。

外国人が安心して日本で働くことができる基盤を整えることで人材を確保でき、外国人労働者も新しいキャリアを歩んでいけるのではないだろうか。

（村田澪）

女性輝く社会目指して

ＮＰＯ、学生と共に課題解決

長野県塩尻市の返礼品を学生が検討している様子＝2018年８月21日（ハナラボ提供）

新しいライフスタイルに生き生きとする母親の姿、自分の可能性に制限をかける昔と変わらぬ姿、能力ある友人が社会で力を活かさずに家庭に入る姿―。これらの経験からハナラボ代表理事の角さんは活動を始めたと語る。

ハナラボは社会課題の解決を通して、女子大学生の創造力やリーダーシップを育むＮＰＯ法人である。また、女子大学生が将来の夢に携わる社会人女性（ハナラボチア）と交流できるキャリア支援も行っている。

ハナラボに参加する学生は、活動を通して実績を得ること以上に、精神的な成長を得られている。具体的には、長野県塩尻市との商品開発プロジェクトでのことだ。

利用されていない地域資源を活用した「ふるさと納税返礼品」を企画・製造・販売マーケティングに学生が中心となり活動した。その道のりは、険しかった。製造会社との行き違い、梱包デザインのミス等の数々の困難があった。しかし、女子学生達は、諦めずにやり遂げた。初めはリーダー的な存在ではないと発言していた学生たちが、主体的に行動できるまでに成長した。この小さな社会で学んだことを糧に新たな社会で活躍する女性が増えていくであろう。

また、学生たちのサポーター（ハナラボチア）の女性たちも活動を通して、新たな考え方や価値観を獲得している。社会人女性たちが資格や経験を活かし、興味のある学生と交流、支援している。支援する社会人女性たちも交流を通して、自然と自己肯定感が高まるという雰囲気があり、双方にとって利益がある相乗効果が生まれていた。

「誰もが自由に選択挑戦できて、社会を作る主体として本来持つ力を発揮できる社会」をビジョンに多くの女性の活躍を支援する。

（上川原葵）

衣類を命救うワクチンに

子ども助け支援の輪広げる

ポリオワクチンの予防接種を受ける子ども＝3月28日、ラオス（日本リユースシステム運営提供）

古着deワクチン（日本リユースシステム運営）は、ポリオワクチンの寄付先である「ラオス人民共和国」へ支援活動に参加し、利用者へ活動報告を行った。コロナの影響を受け約3年ぶりの実施となった。

古着deワクチンでは、不要になった衣類をカンボジアや開発途上国を中心に輸出し、現地で販売して再利用。衣類が1枚売れるごとに1ポリオワクチンが寄付されるサステナブルな、お片づけ商品である。

カンボジアの直営センターでは、ポリオ障害の後遺症があるスタッフや、貧困地区で育った若者が働いている。センターでは1洋服を販売する毎に1ポリオワクチンを寄付する仕組みがあり、スタッフは未来の子ども達が自分たちと同じ苦しみを味わうことがないように願いを込めて働く。センターのコンセプトは「支援されていた側が支援する側に」。未来の子どもたちに同じ苦しみを背負わせないための活動だ。

同社の辻本真子さんは、「今後は衣類の他に、キッチンや着物のシリーズを展開し、循環型社会を創っていきたい」と語った。

古着deワクチンは一過性のものでなく、サステナブルな衣類の再利用、ワクチン寄付で子どもを救う、国内外での雇用創出などのハッピーなサイクル、すなわち循環型の世界の創造につながっている。

衣類を送るという行動一つで助かる命があり、古着deワクチンを通して子どもの新しい人生の一端を担うことができると言えるだろう。

（宝崎紫苑）

地域とつながり働く

松戸のシルバー人材

松戸市のシルバー人材センターには千葉市に次いで多い約2000人が在籍している。年金の他に収入を得ながら、地域に貢献したい、人との繋がりを保っていたい人が多く登録している。「安倍元総理も、シルバー人材センターは労働力の一翼を担う存在であると言っていた」（松戸市シルバー人材センター、鈴木暢事務局長）。

シルバー人材センターに勤める高齢者の平均年齢は75歳。雇用延長により平均年齢は少しずつ上がってきている。そのため、提供できる仕事の幅が狭くなっていることや、技術の継承や育成が困難になっていることが課題だという。会員が登録して良かった、地域の方が頼んで良かったと思えるように、信頼を築き上げて拡大していきたい」（鈴木事務局長）。

会員の石井貴義さん＝9月12日、松戸市

シルバー人材センターで働くモチベーションは、喜んでくれる地域住民や技術の習得だ。「年金の存在によりある程度のリスクがあっても、新しいことに飛び込んでみようと思える。そして、あまり儲からなくとも、個人事業主として自分の世界を作っていく楽しみがあり、自身の夢を追いかけることは健康にいい」と会員の石井貴義さん（68）はやりがいを語ってくれた。

定年後でも仕事をし、地域のために働くことで、地域からの疎外感がなくなり、プライドが保てる。シルバー人材センターは少子高齢化が進む今、高齢者の新しいキャリアのあり方だと感じた。

（安田明未華、中村水咲）

2023年10月26日付　千葉日報